

さらなる高難度の技に挑み 次は必ずメダルを掴む

父の影響で始めたスノーボード

私がスノーボードを始めたのは4歳の頃で、趣味で楽しんでいた父に連れられて行ったのがきっかけです。最初は年に数回遊ぶ程度でしたが、小学生になると週末は必ずグレンデへ。リフトの始発から終わりまでずっと滑り続けるような日々でした。オフシーズンにはスケートボードやウォータージャンプ（スノーボードでプールに飛び込む練習）で感覚を磨くなど、自然とスノーボードが中心の生活になっていましたね。

ジャンプの浮遊感に魅せられて

父は熱心に滑り方を教えてくれたのですが、実は私がスノーボードをするようになってから、「オリンピックを目指さよう」と考えていたそうです（笑）。初めてジャンプを経験したのは小学2年生の頃。当時は着地をうまく決めることは考えず、ただ純粋に空中に浮く感覚を楽しんでいました。この空を飛ぶ感覚に魅了されて、「ビッグエア」と「スロープスタイル」という競技に取り組むようになりました。

心を整えることも大切に

13歳でプロになり、16歳で平昌、20歳で北京と2度のオリンピックを経験しました。なかでも印象に残っているのは北京のビッグエアです。前日の予選で左手を骨折してしまったのですが、メダルを諦めようとは思いませんでした。決勝では予定していた技を変更し、右手でできる最高難度の「トリプルアンダーフリップ」に挑戦しました。雪上でやったことすらない技でした。空中では回り切れたものの、着地に失敗。4位という結果でした。メダルまであと一歩だっただけに、現実を受け入れるのは時間がかかりましたね。1ヶ月後の大会で同じ技を成功させたとき、ようやく気持ちの上でリベンジできたと感じました。

ストレスを溜めないことを大事にして



スノーボード選手
岩渕 麗楽 さん

いて、オフの日にはカメラを持って景色の良い場所へ出かけ、気分転換をしています。最近では日帰りで山梨にも行きました。

国外の大会に出ることが多く、ヨーロッパからアメリカといった長距離移動ではどうしてもストレスを感じます。そんな時は移動時間があったという間に過ぎるよう、集中できるものを持ち歩くようにしています。自分の場合は推理小説ですね。海外での生活にはもう慣れましたが、枕の高さだけは慣れず、結局は枕なしで寝ています（笑）。

ミラノ五輪では金を目指す

年々プレヤーのレベルが上がってきているので、北京の時と同じでは表彰台には届かないと思っています。ビッグエアは2大会連続で4位と悔しい思いをしました。もっと難度の高い技、回転数の多い技を成功させ、次こそは必ず金メダルを持って帰ってきたいと思っています。

（2025年9月26日に取材しました）



Profile

いわぶち・れいら

2001年、岩手県一関市出身。4歳でスノーボードを始める。13歳でプロテストに合格し、2017年12月にビッグエアでワールドカップ初優勝を飾る。これまでにビッグエアで7勝、スロープスタイルで2勝を果たす。北京五輪では、スロープスタイル5位、ビッグエア4位の成績を収める。

photograph: 遠藤直次